

1 良食味米として消費者に評価される「はれわたり」及び「青天の霹靂」の高品質の高品質・安定生産 ～消費者から信頼される米づくりの支援～

【概要】

- 西北地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導プロジェクトチームを核に、「はれわたり」の良食味・安定生産及び「青天の霹靂」のブランド維持のため、生産指導に取り組んだ。

【背景・課題】

- 「はれわたり」は、栽培のポイントが浸透しつつあるが、良食味・高品質米安定生産のために、関係機関と連携して栽培マニュアルに沿った栽培管理を広く指導する必要がある。
- 県産ブランド米「青天の霹靂」は、ブランド維持のために新規作付者や前年出荷基準未達者に対して、関係機関と連携しながら継続して重点的に指導を行う必要がある。

【普及指導活動の内容】

- 西北地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導プロジェクトチーム（PT）において、指導拠点ほの設置、夏季現地巡回の開催により「衛星ナビ」の活用等について関係機関と意識統一を図った。
- 「はれわたり」生産者に対して、高温時の水管理について重点的に指導したほか、「はれナビ」の周知と適期収穫の徹底を呼びかけた。
- 「青天の霹靂」新規作付者及び前年産の出荷基準未達成者等に対し、集荷団体の指導員と連携しながら個別指導を行った。

【成果】

- 「はれわたり」の管内JA一等米比率は98%以上で目標を達成した。
- 「青天の霹靂」新規作付者及び前年基準未達者の出荷基準達成者の合格者は13人であった。

【対象者】

- 「はれわたり」作付者(620名)、管内「青天の霹靂」作付者(304名うち、新規作付者(2名)及び前年産出荷基準未達者(14名))



育苗講習会(4/25)



PT夏季現地巡回(8/27)



適期刈取講習会(8/29)

2 稼げる「西北型水田農業」の定着に向けたスマート農業の活用推進

～スマート農業の有効活用に向けた人財の育成～

【概要】

- 収量・品質の向上や生産効率を追求するスマート農業技術の普及を図るため、実証活動や情報提供をするとともに、技術を使いこなす多様な人財の育成に取り組んだ。

【背景・課題】

- 水田農業経営の大規模化が進行する中で、労働力不足等の課題に対応できるよう、令和元年からスマート農業技術の普及を推進してきた結果、スマート農機を導入する経営体が大幅に増加した。しかし、その機能を十分に活かし切れていないため、効果的な活用によるメリットの追求と活用できる人財の育成が求められている。

【普及指導活動の内容】

- データ駆動型農業技術を実証するため、「ザルビオフィールドマネジャー」の分析結果に基づき、可変追肥の実演会を開催した。
- 労働力不足に対応し、多様なオペレーターを養成するため、スマート農機の初心者等を対象に、自動操舵システムに関する基礎知識や基本操作に関する研修会を開催した。
- GNSSガイダンス自動操舵システムの導入メリットの紹介やシミュレーターによる本システムが体験できる研修会を開催した。

【成果】

- 「ザルビオフィールドマネジャー」を用いた可変追肥の実演会では、可変施肥マップのドローンへの取り込み、ドローンのセッティング等、詳細な操作方法について生産者の理解が深まった。また、生育マップを活用した可変追肥により、収量が向上し、ほ場内の収量のばらつきが小さくなった。
- 労働力不足に対応し、多様なオペレーターを養成するため、スマート農機の初心者、後継者、女性農業者、新規就農者など機械作業を普段していない人を対象にオペレーター養成研修を実施し、技術の習得を図った。
- GNSSガイダンス自動操舵システムの導入メリットである疲労軽減、作業効率や精度向上などによる生産性が向上することが理解された。

【対象名】

津軽米づくりネットワーク(49名)
スマート農機導入経営体(368経営体)
五所川原広域水田フル活用推進協議会(27名)



オペレーター養成研修会(6/28)



自動操舵システム研修会(1/13)



シミュレーター体験(1/13)

3 交信攪乱剤「コンフューザーR」を活用した適正防除の普及による高品質りんごの輸出基盤強化

【概要】

- 管内のりんご生産者（りんご共同防除組織）を対象に、交信攪乱剤設置実演会、交信攪乱剤の特性や正しい設置方法を周知する講習会等を実施することで、設置面積の拡大及びモモシクイガ等の適正防除の普及拡大に取り組んだ。

【背景・課題】

- 台湾に輸出されたりんご果実からモモシクイガが見つかった場合は、即、輸出停止となることから、完璧な防除が求められている。
- 近年は温暖化の影響により慣行防除を行っている園地でもモモシクイガ被害果の増加が確認されている。
- このような状況から、モモシクイガ等の主要害虫を適正に防除するため、病虫害防除暦の基準薬剤となった交信攪乱剤について効果や正しい設置方法等を周知し、普及拡大する必要がある。

【普及指導活動の内容】

- 各共防連対象の病虫害防除講習会において、モモシクイガ等重要害虫の発生状況や交信攪乱剤設置を基準とした適正防除について周知した。
- 設置時期である5月に交信攪乱剤の設置実演会を開催し、交信攪乱剤の効果やその効果を最大限に発揮するための1樹当たりの設置本数、ディスペンサーの取り付け方法など正しい設置方法について周知した。
- 園地巡回や講習会等で、設置方法や設置時期などについて指導を行った。
- 設置方法の展示ほとして、正しく交信攪乱剤を設置した園地を管内5市町に1～2園地ずつ設置し設置方法の展示を行うとともに、交信攪乱剤効果及び被害発生状況を確認するための調査研究に取り組んだ。
- 調査研究課題として実証した交信攪乱剤の効果を取りまとめるとともに、交信攪乱剤設置の継続・拡大による次年産りんご適正防除のため、各共防連の防除暦説明会等で周知した。

【成果】

コンフューザーRの設置による防除効果について周知され、令和7年産りんごの西北管内でのコンフューザーRの設置面積は1,269haから1,542haに増加した。

【対象名】

管内のりんご共同防除組織及び管内りんご生産者



交信攪乱剤設置実演会 (5/13)



モモシクイガ等適正防除講習会 (5/15)



つがる市共防連
りんご防除暦検討会議 (1/8)

4 持続可能で活力のある農山漁村づくりを目指した「あおり型農村RMO」の育成

【概要】

- 各市町の担い手育成総合支援協議会等と連携して「あおり型農村RMO」の育成に取り組むとともに、五所川原市三好地区の地域資源の発掘・活用、地域コミュニティの再生強化に向け「三好をあじあう会」の支援に取り組んだ。

【背景・課題】

- 農村地域は人口減少と高齢化が進行しており、コミュニティを維持するため、地域経営体や地域の住民が連携し、人口減少に伴う地域課題解決に向けて活動する地域運営組織等の育成が必要である。令和3年度から育成してきた地域運営組織「三好をあじあう会（五所川原市三好地区）」は、活動を主体的に進められるようになってきており、今後の活動の継続、発展に向けて支援を続け、さらに他地区への面的広がりを促す必要がある。

【普及指導活動の内容】

- 五所川原市及び板柳町の担い手育成総合支援協議会等と連携し、地域経営体の育成、共助・共存に向けた集落の意識醸成、地域資源の発掘・活用、担い手育成等に対する取組を支援。
- 地域運営組織「(一社)七和まちづくりネットワーク」が、「ジャズコンサートイベント（7/27）」、「収穫感謝祭（11/23）」を開催したほか、「鰐come祭り・秋（10/18～19）」に三好をあじあう会と共同で出店し、自然乾燥米のPR活動を行った。また、自然乾燥米の販売をブラッシュアップするため、検討委員会を2回（8/29・1/22）開催し、パッケージのブラッシュアップを行った。
- 地域運営組織「三好をあじあう会」が、「三好ザリガニ釣り大会（7/21・9/7、2回）」、「自然体験教室（8/23～24）」、「交流拠点整備講習会（12/13～14・20～21、2回）」、「民泊講習会（11/16・1/25、2回）」を開催し、イベントを通じてボランティア3名が活動に参加してくれるようになった。

【成果】

- 普及指導活動により、モデル集落の育成（三好をあじあう会）、地域資源活用（五所川原地域担い手協）、新規就農者の育成（板柳町担い手協）等が進んだ。（一社）七和まちづくりネットワークは自然乾燥米の販売におけるブラッシュアップを進め、三好をあじあう会は、イベントを通じた外部人材の交流を実現した。

【対象名】

あおり型農村RMO（Region Management Organization:地域運営組織）を目指す西北管内集落及び地域経営体



三好をあじあう会
ザリガニ釣り大会(7/21)



三好をあじあう会
自然体験教室(8/23～24)



七和まちづくりネットワー
ク「鰐come祭」出店(10/18～19)

5 中小規模稲作経営体への高収益野菜導入による複合経営の普及拡大

【概要】

- ・ 基盤整備事業では場整備が行われている中泊町の稲作経営の農業者を対象に、野菜栽培技術を実践しながら学ぶトレーニングファームを設置し、ここを拠点に現地情報交換会や省力化技術・鳥獣害対策の実演会を行い、複合経営の普及拡大に取り組んだ。

【背景・課題】

- ・ 中泊町では令和5年度から中山間地域の3地区で農地中間管理機構関連農地整備事業の工事が始まり、ほ場整備が部分的に完成した。
- ・ 工事をきっかけに野菜導入にチャレンジする動きがでてきたが、栽培への技術的な不安があることから、栽培技術を実践しながら学ぶ仕組みを整えるとともに、省力化や鳥獣害対策等を検討し、普及拡大を支援していく必要がある

【普及指導活動の内容】

- ・ 「トレーニングファーム」(中泊町今泉地区)を設置し、とうもろこしを栽培した。初めての野菜栽培であるため、現地講習会や個別指導により技術習得を図るとともに、良品多収のための土づくりや排水対策の重要性への理解を深めた。
- ・ 現地情報交換会(6/5、8/8、延べ75名)を開催し、生育状況や課題等を共有した。併せて、とうもろこしの播種作業の省力化に向け「目皿式播種機」による播種実演、鳥獣被害の現状や対策の解説、電気柵の設置実演を行った。
- ・ 情報交換会(12/18、23名)を開催し、薄市・今泉地区における野菜栽培の取組結果や課題、新品目の提案、野菜導入による収益力向上のためのロードマップや試算シートを関係者で共有し、今後の作付計画や目指す方向性を検討した。

【成果】

- ・ 中泊町の野菜導入経営体数が前年度の16戸から20戸に増加した。
- ・ 野菜栽培における技術の習得に加え、土づくりや排水対策の重要性が理解され、次年度に向けて、堆肥の施用やスタブルカルチを施工する等の動きがみられた。
- ・ 今泉地区では、とうもろこしに加え、ピーマンにもチャレンジする意向が示された。

【対象名】

- ・ 中泊町の中位小規模稲作経営体(101戸)
- ・ 新規就農者



目皿式播種機による
とうもろこしの播種実演(6/5)



鳥獣害対策の説明(8/8)



情報交換会での意見交換(12/18)